

「鎮主祇園午頭天王守護」石板の発見につながる

## 下市八坂神社の由緒に関する資料の考察

### 二 宮 寿

#### 一、鎮主祇園午頭天王守護の石板を発見

下市地区は、平成二十二年財団法人日本宝籤協会の補助を受けて産業観光による町づくり事業を実施、その一つとして地区内遺跡の補修を行ったが、その時八坂神社最上段の石像群を補修中に地面の中に埋もれていた石を発見、土を落とし文字を見て、「鎮主祇園午



発見の鎮主祇園午頭天王守護の石板

頭天王守護」(鎮守ぎおんござてんのう守護)の石板と気づいたのである。発見の位置は、奥の院とよばれていた八坂神社神殿の奥、神殿上の一段高くなった

岡の上で、三基の石祠の真ん中の祠の前の地中に裏返しになって埋

まっていた。真ん中の祠が空であったので、石板はそこに安置した。

これで石祠の様子は、右が兜を冠った石像、真中が発見した石板、(この石祠には天保二年三月の文字と世話人の名が刻まれている)

左が狐の焼き物のかけらが入った石祠という状況となった。他に猿田彦大神石塔二基と青面金剛の石像一体があるが、これらは庚申闕係で八坂神社との関係はない。青面金剛は二宮明久氏宅の青面金剛と姿態が同じであり、誤りはないと考える。



八坂神社神殿上にある三基の石祠

石板の「鎮主」は下市が平安であるよう鎮める主(ぬし)主体の神であり、「祇園午頭天王」は須佐之男之命のことで神仏習合時代の仏語での神号であることから、石板は祇園社(八坂神社)の神霊なのである。

下市八坂神社については、これまで由緒書きが見つからない。昔は存在したのであろうが、下市は藁家が密集して火事が多く、何度も大火があつて多くの家が焼け、また、お庄屋の家も明治以後になくなっていく。石板の発見をきっかけに、この三基の石祠の正体は何かを中心に、八坂神社の由緒について関係資料で考察することとした。

#### 二、挟間町誌による八坂神社の由緒

挟間町誌には、八坂神社の由緒について次のように書かれている。「明治二十八年四月、大字下市に鎮座する・祇園宮(茂八屋敷)・



合祀前の大將軍神像

大將軍神社（平山）・稻荷社（稻荷坂）の三社を合祀して現在地に当社を創立し、各社の神璽を安置した。なお、祇園午頭天王の創祀は天保二年三月と伝え、そ

の石祠が社殿脊後の丘の上にある。」

文面によれば、問題にしている三祠は合祀する前の祇園社、大將軍社、稻荷社の神璽で、ここが合祀後の安置先ということになる。

しかし、ここでひとつ問題にしたいことは、文中の明治二十八年四月に合祀し創立したという文言である。これは現在の八坂神社の鳥居に明治二十八年四月と刻んであることを根拠に書いたのであるが、我々が聞いている所では、この鳥居は宮屋敷に一度合祀した時にできた鳥居を組み立てたままここに移動したと聞いている。従って現在地に創立したのではなく、最初上大六に合祀、創立し、その後現地に移動したのである。また、お宮の建設と鳥居が同時というのは経費の面からも無理があると思われる。

三、豊後国大分郡社明細牒（二冊之内乾）による八坂神社の由緒石板発見について挾間史談会で会員皆さんにお話したところ、事



庚申講の青面金剛石像

務局長の佐藤末喜さんより前記の資料を教えて頂いた。これによると八坂神社について次のことが書かれている。（関係事項のみ抜抄）  
「・由緒―不詳、明治六年村社二列セラル

・神殿―大正四年六月十七日許可ヲ得テ

大正四年八月二十七日字上大六ヨリ移転ス」

この書の発行時期は分からないが、八坂神社移転の詳しい月日が書かれていることから、移転の頃に発行されたものと考えられ、そうなれば、その当時、明治の初期の世の中を知っていた人も生存していたと思われることから、その内容は信用できると考えられる。

明治六年にはすでに村社に列せられているのである。創立は従って明治六年以前となり、そして大正四年移転したことになる。合祀とか、村社とかこのあたりの事情をよく知るため、その当時の神社関係の動向を調べてみた。明治初めの動向は次の通りである。

#### 四、明治当初の神社関係の動向

年表式に関係事項を列挙する。

慶応四年（一八六八）三月十四日―五カ条の誓文発布、王政復古、

祭政一致の方針を示す。

慶応四年三月二十八日―神仏混淆禁止令を発布

律令制の神祇官が復活、全国の神社の神職は神祇官付属、神道  
国教化の布告に続き、大小神社に別当村僧として神職している  
僧身分の還俗が命じられ、神職の者はその家族まで神葬祭に改  
めることとされ、「神仏判然令」が出された。

宇佐神宮等は八幡大菩薩の称号を八幡大神と唱え、神社が権  
現、菩薩等仏語の神号とすること及び仏像を神体とすることが  
禁止された。

明治一年（一八六八）九月八日 明治と改元

明治四年（一八七二）五月十四日 神社を国家の宗祀とし、社格、  
神官制を制定

また、大小神社の氏子調べ規則（神社の格を決める基準）を制  
定。村全員が一社の氏子になれば「村社」の社格を得る規則。  
明治八年（一八七五）六月には「一村一社」の制度となり、併せて  
無資格社（雑社）、村社、郷社等規模、社格が決められ、社殿  
の仏像、仏具のまぎらわしいものは至急取り除くこととされ「神  
仏判然令」の徹底が図られた。

昭和二十年（一九四五）十二月 神道指令が發布された。正しくは  
国家神道、神社神道に対する政府の保証、支援、保全監督並び  
に廃止に関する件で、アメリカのGHQが日本政府に発した覚  
書。GHQは国家神道の廃止による国家と宗教、政治と宗教の  
徹底分離の実現と、神社神道は以後民間の宗教として存続でき  
ることを指示した。これを受けて政府は宗教の統制法規である  
宗教団体を廃止、翌年に神祇官制及び神社関係の全法令を改

廃し国家神道は打ち砕かれた。

この神社関係動向を見ると合祀は、明治四年に出された社格と氏  
子調べ規則、その発展としての明治八年の「一村一社」制度がその  
要因であることが分かり、八坂神社の明治六年の創立はうなづける  
鳥居の明治二十八年も無理のないことであり、八坂神社現在地に  
建立の、石段新築記念碑の大正八年も適合しているところとなる。

五、合祀された三社の合祀前について

こう見てくると、八坂神社最上段の三基の石祠は合祀された三社  
の神霊であることになるが、この三社の合祀前について考えたい。  
一、祇園社について

祇園社は村なかの茂八屋敷裏にあったと言い伝えられているが、  
故二宮静雄さんが生存中に私が聞いたところによれば、二宮明久氏  
宅の裏、東に井路があるが、その井路から西に十メートル位入る道  
があつて、そこに神社のやしろの敷地地番があつたのを、昔の地番  
の地図で見たことがあるとのことであつた。

ところでこの祇園社はどの祇園社から勧請（分神）したのであ  
ろうか。私の考えでは大分の上野の祇園社から勧請したものと思わ  
れる。今の交通状況では挟間と上野とは、あまりつながりが考えら  
れないが、江戸時代に大道の峠はなく、挟間の人々はみんな上野廻  
りで、府内（大分）の城下町に入っていたという。上野廻りの関係  
で上野の祇園社がお参りすることが多かったのではないだろうか。

上野祇園社、及び大道通り交通の歴史を調べてみた。

一一〇〇 康和 二年 大分府内上野岩屋寺境内に祇園社が創建

一六一一 慶長一六年 竹中重義が堀切峠（大道）を南大分との間

に開削、しかし道は険しく、古国府、元町經由、塩九  
升口から城下町に入る道が主たる藩道であった。

一六一八 元和 四年 藩主竹中重義岩屋寺境内で荒廃していた祇

園社を現在地に移し再建、往隈郷の氏神とし、藩主の  
肝入りで祭祀を行う。

一六二五 寛永 二年 古国府 利光自休、祇園社の楼門を完成。

一六三四 寛永一一年 日根野吉明府内城主となる。

一六三六 寛永一三年 一伯公が子息松千代の名で祇園社本殿改築。

一六三九 寛永一六年 藩主日根野吉明「浜の市」と祇園社の祭り  
を府内城下町の二大祭りとして奨励する。

一六五〇 慶安 二年 日根野吉明が初瀬井路を作る。

一八三一 天保 二年 下市八坂神社の基となる祇園社できる。

一八六〇 万延 一年 大道堀切峠を車が通れるよう切り下げる。

一八六八 明治 元年 明治維新

一八七一 明治 四年 神仏分離令により上野の祇園社は弥栄神社  
となり郷社の格式が与えられる。

一八八五 明治十八年 木製の明碩橋架橋、肥後街道、両筑街道な  
どが明碩橋經由となり、堀切峠への新道ができて中心  
の通りに変わる。橋ができるまでは渡し舟であった。

一九二九 昭和 四年 鉄製の明碩橋架橋。

一九五五 昭和三十年 明碩橋の岸に頑丈な堤防ができる。

大道トンネルができる。

一九六〇 昭和三五年 府内大橋完成

大道の堀切峠が中心の通りになるのは明治十八年からのことで、  
それまでは上野の道を通って府内（大分）に行っていたのである。

上野の祇園社から勧請した可能性は高いと思われる。祇園社は暴風  
雨神や農耕神といわれている。豊作を祈って建立したのであろう。

二、大將軍社

谷村の大將軍社は農耕の牛馬の神様である。昔牛馬が病気になる  
と大変であった。農家はどこも牛馬を飼っていたので、これは谷村  
の大將軍社から勧請した可能性が高い。平山にあったといわれるが、  
平山のどこであったのであろうか。馬子などの通る街道筋だったので  
はないかと考える。

三、稻荷社

稻荷坂にあったといわれるが、稻荷坂は今、その形だけわずかに  
残っている。医大道路の坂の上の方、大分に向かって左側に斜めに  
急な小道の坂が道の横に見える。私達が子どもの頃は普通の山道の  
坂で、古野に行く道であり、焚き木を取りに行く道であった。「日  
本の神話」洋泉社発行に稻荷様について次のように記してある。

「お稻荷様は須佐之男命の子とも宇迦之御魂大神のことである。神  
名「宇迦—ウカ」は穀物や食べ物を意味し、稻魂（うかのみたま）  
と表記されることもあり、文字通り五穀豊穰・稲の霊を指してい  
る。」

狐はお稻荷様のお使いである。昔、下市から見える平山の稻荷坂

の辺り（医大道路の上辺り）に、深夜、狐火といわれる青白い火が、動物が走る速さで、一から二、三と走るのが見えたという話を聞いた。また、稲荷すし等持ってこの坂を通るとききれいな女性が現れて誘われ、だまされてすしを取られたという話も聞いた。医大の団地もなく、医大道路も無く、真つ暗闇の平山の時代の話である。

#### 四、宮屋敷より現地への移転

通称「宮屋敷」は願成寺と蓮正寺の間の位置で鳥居まで建てたのであるが、敷地が狭く樹がないのでお宮らしくないと不評であった。故内田孝次郎氏が区長の時、自分の土地であった下市の東北（鬼門）に当たる現地を寄贈してここに移転したと聞いている。お宮の石段は大正八年に設定し、その新築記念碑が立っている。

#### 六、八坂神社の由緒で明確になったこと

午頭天王の石板の発見をもとに、八坂神社の由緒に関連して資料を確認してきたが、明確になったことを、次に記しておきたい。

- 1、祇園社の創立は天正二年三月である。
- 2、八坂神社の合祀創立は明治六年である。
- 3、八坂神社創立当時の場所は、上大六の通称宮屋敷である。
- 4、現在地へは、大正四年六月に許可を得て、大正四年八月に大六より移転した。
- 5、鳥居の明治二十八年は大六の宮屋敷での建立の年である。

下市八坂神社最上段の石像群のことを金毘羅様と聞き伝えている

人もいる。しかし、この石祠三基が合祀前の三社の神璽であるとすれば他に金毘羅様の像はない。ただ一つあるのは石段を上がってすぐ左にある像であるが、これは庚申の青面金剛の像である。町誌にあるように合祀された祇園社、大將軍社、稲荷社の三体の神璽を祀つてあるというのが正しいと考える。神殿の奥、神殿の上段に高い石段まで築いて、安置したのである。合祀前の神璽を安置するには一番ふさわしい場所ではないだろうか。

三基の石祠の中、右側の大將軍の像は兜を冠っているし、京都市陽の且椋神社の大將軍神像、京都上京の大將軍八神社の大將軍神像と比較してもよく類似しており、大將軍像に間違いないと考える。

一番左の石祠、稲荷様は狐の焼き物のかけらしい物が入っているが、狐かどうかは判定できない。しかし、鎮主祇園午頭天王の石板が出てきたことで、合祀前の三社の神璽であり、その神璽を安置する三基の石像であることは確かになったのではないかと考える。